

# 平成30年木造建築士試験

試験場	受験番号	氏名
	—	

## 問題集

学科Ⅲ（建築構造）

学科Ⅳ（建築施工）

次の注意事項及び答案用紙の注意事項をよく読んでから始めて下さい。

〔注意事項〕

1. この問題集は、学科Ⅲ（建築構造）及び学科Ⅳ（建築施工）で一冊になっています。
2. この問題集は、表紙を含めて14枚になっています。
3. この問題集は、計算等に使用しても差しつかえありません。
4. 問題は、全て五肢択一式です。
5. 解答は、各問題とも一つだけ答案用紙の解答欄に所定の要領ではっきりとマークして下さい。
6. 解答に当たり、適用すべき法令については、平成30年1月1日現在において施行されているものとしします。
7. 解答に当たり、地方公共団体の条例については、考慮しないこととしします。
8. この問題集については、試験終了まで試験室に在室した者に限り、持ち帰りを認めます。  
(中途退出者については、持ち帰りを禁止します。)

# 学科Ⅲ（建築構造）

〔No. 1〕 木造建築物に作用する荷重及び外力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 住宅の居室における床の積載荷重は、一般に、「床の構造計算をする場合」より「地震力を計算する場合」のほうが大きい。
2. 床の積載荷重は、一般に、「住宅の居室」より「事務室」のほうが大きい。
3. 固定荷重に対する積載荷重の割合は、同規模・同形状の場合、一般に、鉄筋コンクリート造建築物より木造建築物のほうが大きい。
4. 積雪荷重は、屋根に雪止めがなく、屋根勾配が60度を超える場合、零とすることができる。
5. 多雪区域において雪下ろしを行う慣習のある地方の積雪荷重は、雪下ろしの実況に応じて垂直積雪量を1mまで減らして計算することができる。

〔No. 2〕 木造建築物に作用する地震力及び風による水平力等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 地震力と風による水平力とは、同時に作用しないものとして考える。
2. 地震力及び風による水平力は、建築物に対して、短期に生ずる力として考える。
3. 風による水平力は、一般に、2階部分より1階部分のほうが大きい。
4. 風による水平力は、積載荷重が大きいほど大きい。
5. 屋根面に作用する風圧力は、屋根勾配によって、正圧にも負圧にもなる。

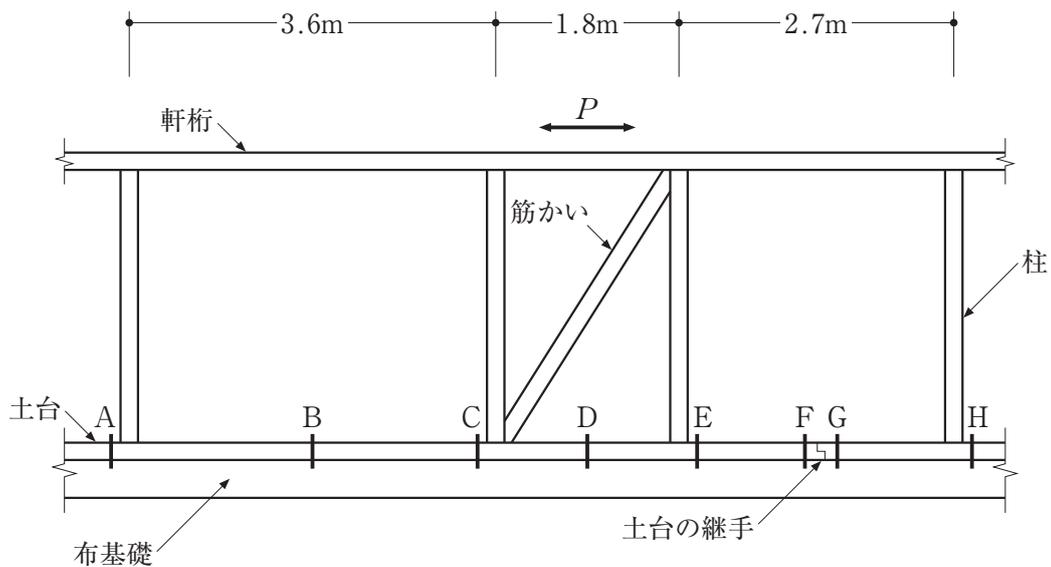
〔No. 3〕 木造建築物における部材の名称とそれを使用する部位等との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 対束 ————— 床組
2. 力桁(添え桁) ————— 軸組
3. 木ずり ————— 外壁
4. ささら桁 ————— 階段
5. フーチング ————— 布基礎

[No. 4] 木造2階建て住宅における鉄筋コンクリート造の基礎又は地盤に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、基礎については構造計算は行わないものとする。

1. べた基礎の底盤直下から深さ1.5mまでの地盤が軟弱であったので、浅層混合処理工法(表層改良)による地盤改良を行った。
2. 地盤の支持力を確認するために、スウェーデン式サウンディング試験を行った。
3. 地盤の凍結のおそれのない地域であったので、べた基礎の根入れ深さを18cmとした。
4. 地盤の長期許容応力度が $25 \text{ kN/m}^2$ であったので、底盤の厚さ15cmのべた基礎とした。
5. べた基礎の立上り部分の主筋として、異形鉄筋D10を立上り部分の上端及び下部の底盤にそれぞれ1本ずつ配置した。

[No. 5] 図のような筋かいをもつ木造の軸組に、水平力 $P$ が作用するとき、アンカーボルトの位置A~Hの組合せとして、最も適当なものは、次のうちどれか。ただし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとする。



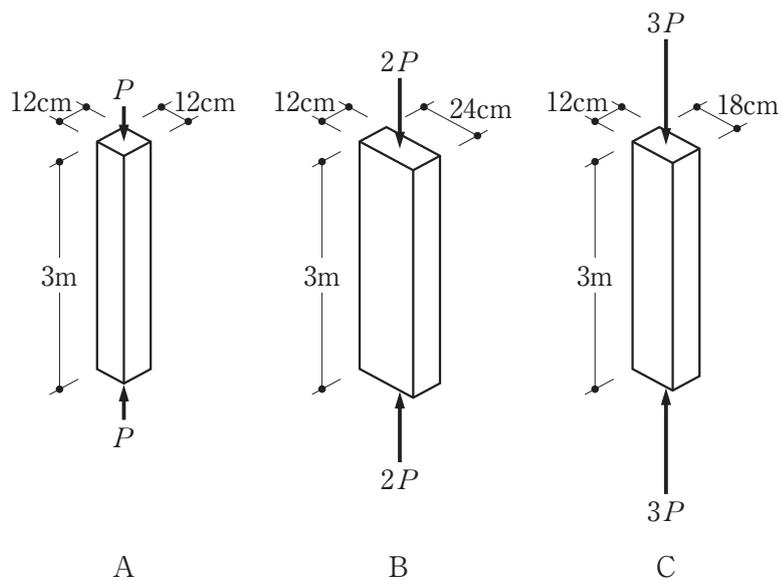
1. A、B、C、D、F、H
2. A、B、C、D、G、H
3. A、B、C、E、G、H
4. A、C、D、E、F、H
5. A、C、D、E、G、H

〔No. 6〕 木造軸組工法による2階建て住宅の柱又は横架材に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

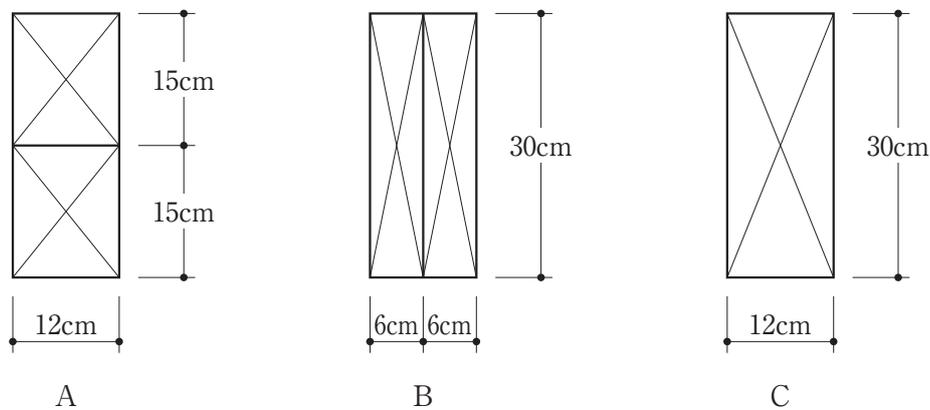
1. 添え柱は、大きな荷重を受ける小屋梁や床梁を支える柱の補強のために設ける。
2. 2階の柱の上部をつなぐ部材で、屋根荷重を受けないものを、頭つなぎという。
3. 梁の横座屈を防止するためには、梁せいを大きくするよりも、梁幅を大きくするほうが効果的である。
4. 小屋梁に丸太を用いる場合、所要断面は、丸太の末口寸法において確保する。
5. 母屋の継手は、小屋束間の中央部付近に設ける。

〔No. 7〕 図のような両端から荷重 $P$ 、 $2P$ 又は $3P$ を受ける木造の柱A、B及びCの座屈のしにくさの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての柱の材質、支持条件は同一とし、荷重は図心にかかるものとする。

1.  $A > B > C$
2.  $A = B > C$
3.  $A = B = C$
4.  $C > A = B$
5.  $C > B > A$



〔No. 8〕 図のような断面を有する製材(木材)の梁A～Cの曲げ強さの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての梁の材質、支持条件及びスパンは同一とし、梁A、Bを構成する部材はそれぞれ相互に接合されていないものとする。

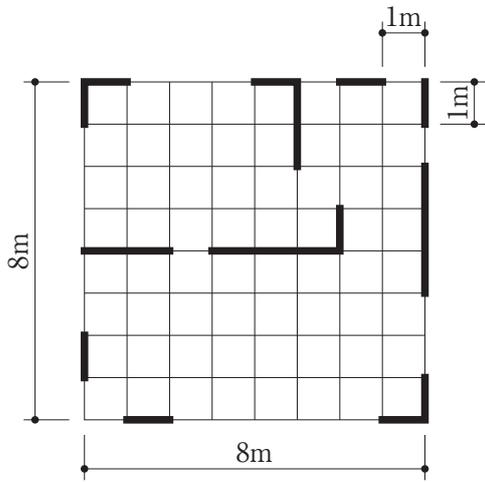


1.  $A = B = C$
2.  $A = C > B$
3.  $A > B = C$
4.  $B = C > A$
5.  $C > B > A$

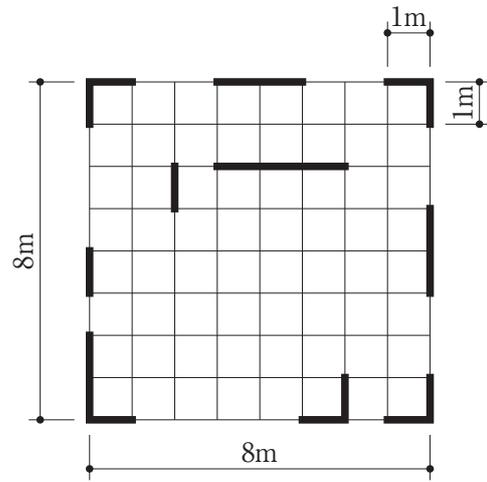
〔No. 9〕 木造軸組工法による建築物の耐力壁に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 2階に配置する耐力壁のうち、両端部の柱の直下に1階の柱を配置することができなかったものについては、耐力壁に接する胴差のたわみを考慮して壁倍率を低減した。
2. コの字形の平面形状を有する建築物であったので、その平面をいくつかの長方形の区画に分割し、それぞれの区画で壁量を満足するように耐力壁を配置した。
3. 同じ構面内の筋かいは、傾きの方向が同じ向きとなるように配置した。
4. 大壁造の耐力壁として、構造用合板(910 mm×1,820 mm)を縦張りとしたので、その継目部分には受材(胴つなぎ)を設けた。
5. 真壁造の耐力壁として、落とし込み板(断面寸法 3 cm×15 cm)を、柱と柱の間にだぼを用いて、所定の方法により接合して積み上げた。

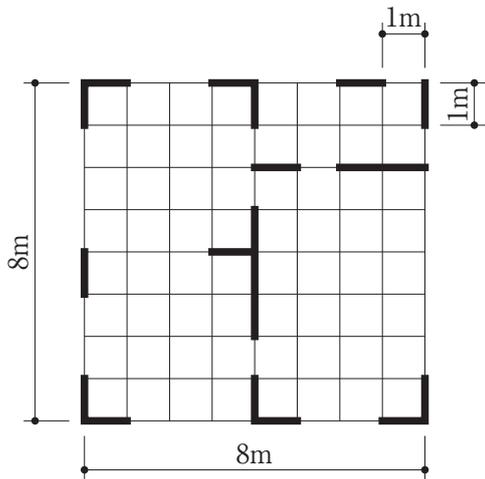
[No. 10] 木造軸組工法による平家建ての建築物において、図に示す平面の耐力壁(図中の太線)の配置として、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、屋根は日本瓦葺(地震力に対する必要壁率は  $15 \text{ cm/m}^2$ )とし、全ての耐力壁の倍率は1とする。



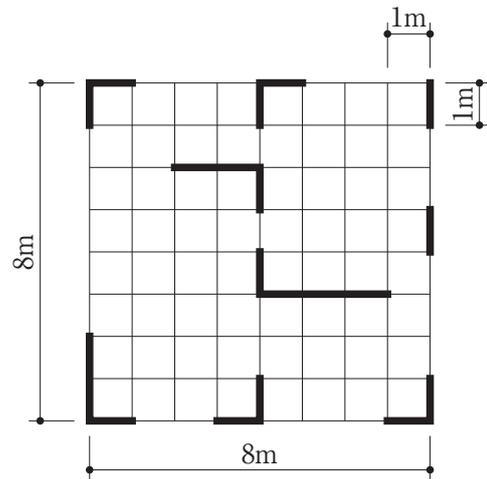
1.



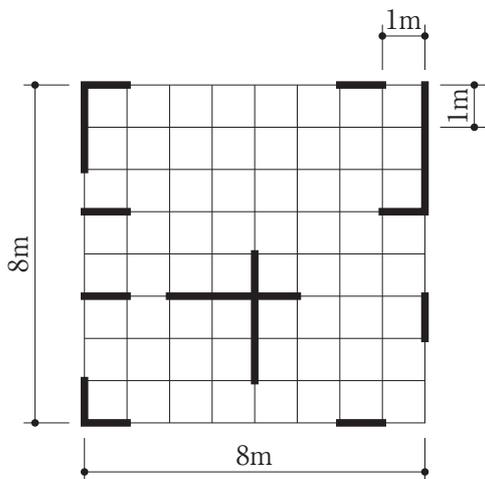
2.



3.

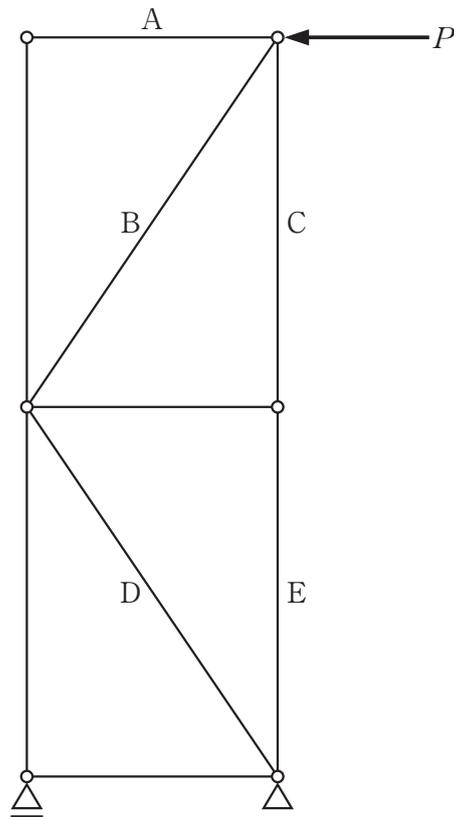


4.



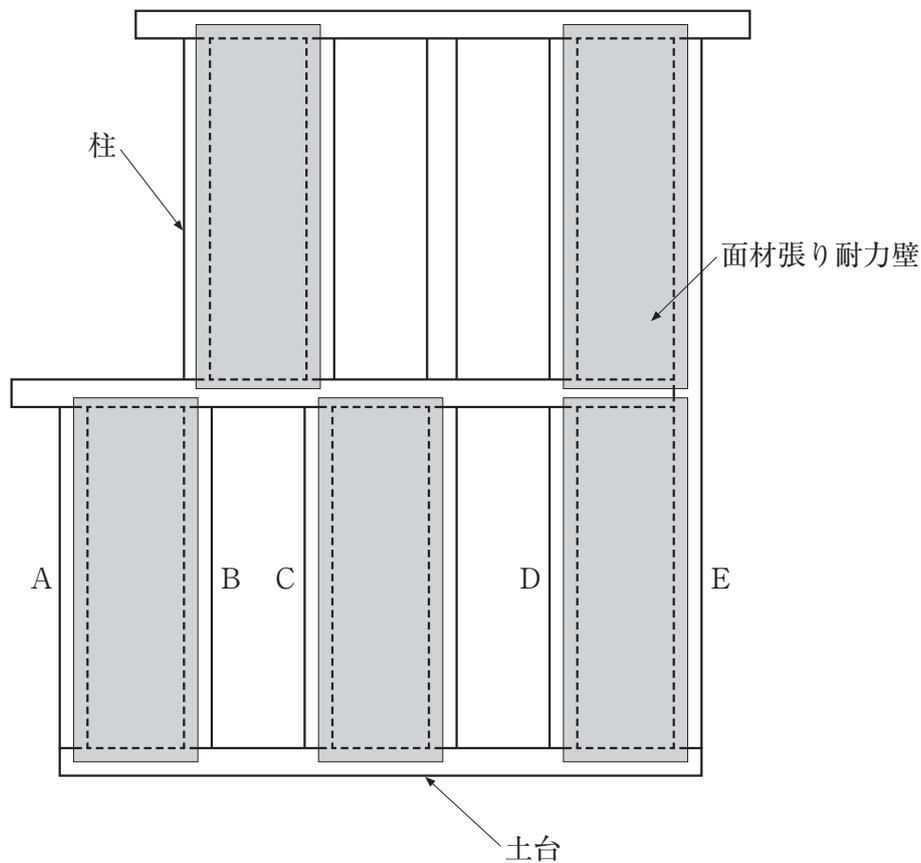
5.

[No. 11] 図のような軸組における部材A～Eについて、水平力 $P$ が作用することにより圧縮力を受けるものは、次のうちどれか。



1. A
2. B
3. C
4. D
5. E

[No. 12] 図のような2階建ての木造建築物の耐力壁の配置において、水平力を受けたときに柱A～Eの脚部に生じる引抜き力が、最も大きいものは、次のうちどれか。ただし、耐力壁は面材張り(■部分)で倍率は2.5とする。

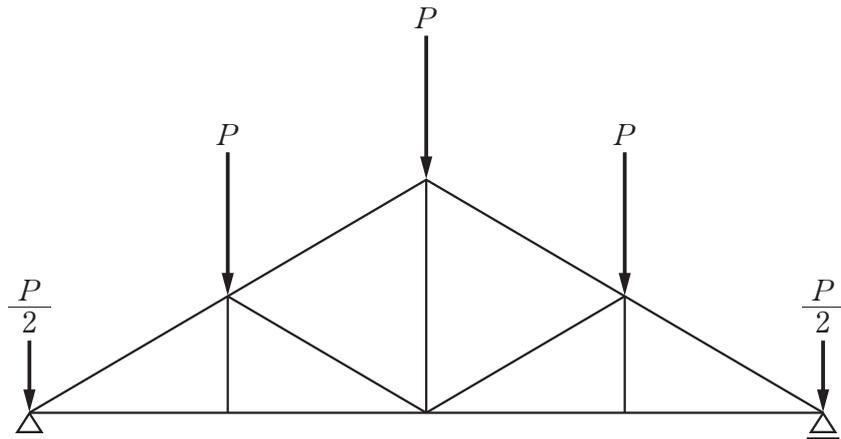


1. A
2. B
3. C
4. D
5. E

[No. 13] 木造建築物の小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 与次郎組には、棟持ち柱式、天秤梁式などがある。
2. 茅負は、軒の出を深くするために、てこの原理によって鼻母屋を支える部材である。
3. さす組は、2本の斜材と小屋梁等で三角形の骨組を構成する小屋組である。
4. 垂木小屋組(垂木構造)は、中間部分を母屋で支持することなく、棟木から桁まで垂木を掛け渡して屋根を構成する小屋組である。
5. 和小屋(束立て小屋組)の小屋梁に生じる主な応力は、曲げモーメントである。

[No. 14] 図のような荷重が作用する小屋組(洋小屋組)に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。



1. 合掌には、圧縮力が作用する。
2. 真東には、圧縮力が作用する。
3. 方づえには、圧縮力が作用する。
4. 陸梁<sup>ろく</sup>には、引張力が作用する。
5. 吊束<sup>つり</sup>には、引張力も圧縮力も作用しない。

[No. 15] 木造軸組工法による2階建ての建築物における2階床組A～Cの床の水平剛性の大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、火打材は用いないものとし、受材・根太等への釘打ちはそれぞれ所定の方法によるものとする。

- A：構造用合板(厚さ 12 mm)を、落とし込みの根太(間隔 303 mm)に打ち付けたもの
- B：構造用合板(厚さ 24 mm)を、根太を設けず、横架材・受材に直接、四周釘打ちとしたもの
- C：構造用合板(厚さ 24 mm)を、根太を設けず、横架材に直接、川の字釘打ちとしたもの

1.  $A > B > C$
2.  $A > C > B$
3.  $B > A > C$
4.  $B > C > A$
5.  $C > A > B$

〔N o. 16〕 枠組壁工法による2階建ての建築物に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 長さ5mの耐力壁線に、幅3mの開口部を設けた。
2. 耐力壁の配置に当たっては、耐力壁線により囲まれた部分の水平投影面積が、 $30\text{ m}^2$ ( $6\text{ m} \times 5\text{ m}$ )となるようにした。
3. 床根太の間隔を455mmとしたので、床材(床下張り材)として、厚さ12mmの構造用合板を用いた。
4. 外壁の出隅部(外壁の耐力壁線相互の交差する部分)において、長さ910mmの耐力壁を設けた。
5. 建築物の内部の耐力壁として、枠組壁工法による耐力壁と木質接着複合パネルによる耐力壁を併用した。

〔N o. 17〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の構造計画に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 耐力壁の配置が偏っていたので、地震時における建築物の平面的なねじれを防止するために、床の面内剛性を大きくした。
2. 軸組に方づえを設けて水平力に抵抗させることとしたので、方づえを取り付けた柱が、先行破壊しないことを確認した。
3. 断面寸法が9cm角の木材の筋かいが取り付く通し柱と胴差との仕口部分を、ホールダウン金物(引寄せ金物)を水平に用いて補強した。
4. 吹抜けを有する建築物であったので、2階の壁量計算用の床面積は、2階の床面積に吹抜け部分の面積を加えたものとした。
5. 軸組に筋かいを設けた耐力壁を用い、隣り合う耐力壁線相互の間隔を最大8mとした。

〔N o. 18〕 木造軸組工法による2階建ての既存建築物の耐震性を向上させる方法として、一般に、最も効果の低いものは、次のうちどれか。

1. 下屋及び2階の屋根葺材を、金属板瓦棒葺から日本瓦葺に葺き替えた。
2. 耐力壁が設置された下屋の屋根下地材を、小幅板から構造用パネルに張り替えた。
3. 大きな吹抜け部分を、火打金物や構造用合板を張り付けたキャットウォークにより補強した。
4. 1階の耐力壁の配置を釣り合いよくするため、開口部の一部を構造用合板を用いた耐力壁とした。
5. 無筋コンクリート造の布基礎であったので、あと施工アンカーによる差し筋を行い、新たに鉄筋コンクリート造の布基礎を抱き合わせた。

[No. 19] 木造建築物の各部における鉛直荷重による力の流れとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 1階床荷重(束立て床)

床板 → 根太 → 大引 → 床束 → 束石

2. 2階床荷重(組床)

床板 → 根太 → 小梁 → 大梁 → 胴差 → 柱

3. 2階天井荷重(和小屋)

天井板 → 野縁 → 野縁受 → 吊木<sup>つり</sup> → 吊木受<sup>つり</sup> → 小屋梁

4. 屋根荷重(和小屋寄棟)

野地板 → 配付け垂木 → 母屋<sup>もや</sup> → 隅木 → 小屋束 → 飛梁 → 軒桁

5. 屋根荷重(洋小屋)

野地板 → 垂木 → 母屋<sup>もや</sup> → 合掌 → 陸梁<sup>ろく</sup> → 敷桁 → 柱

[No. 20] 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ある一定以上の荷重を継続して木材に加えた場合、時間の経過とともに変形が増大する現象を、クリープという。
2. 木材の乾燥収縮率の大小関係は、接線方向 > 半径方向 > 繊維方向である。
3. 木材を加熱した場合、約 260℃ に達すると引火し、約 450℃ に達すると周囲に炎がない場合であっても自然に発火する。
4. 木材の年輪は、木の成長速度が「春から夏にかけて」と「夏から秋にかけて」で異なることによって生じる。
5. 木材の強度は、繊維飽和点以下では、含水率が高いものほど大きい。

〔No. 21〕 木材の強度に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木材の繊維方向の圧縮、引張り及びせん断の基準強度の大小関係は、一般に、引張り > 圧縮 > せん断である。
2. 長期の積雪時の構造計算をする場合については、木材の繊維方向の長期許容応力度を割り増しすることができる。
3. 根太などの並列材に構造用合板等の面材を張り付ける場合には、その並列材の曲げに対する基準強度を割り増しすることができる。
4. 木材のめり込みに対する基準強度は、樹種によって規定されている。
5. 木材の繊維方向、半径方向及び接線方向の強度の大小関係は、一般に、繊維方向 > 半径方向 > 接線方向である。

〔No. 22〕 木質材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. CLT(直交集成板)は、挽板<sup>ひき</sup>を幅方向に並べたものを、各層の繊維方向が直交するように積層接着したものである。
2. LVL(単板積層材)は、切削機械により切削された単板の繊維方向を互いにほぼ平行にして積層接着したものである。
3. OSB(構造用パネル)は、木材の切削片を配向させた層を、互いに直交するように積層接着したボードである。
4. MDF(ミディアムデンシティファイバーボード)は、主に木材などの植物繊維を成形した繊維板であり、日本工業規格(JIS)において、普通MDF又は構造用MDFに区分される。
5. 「合板の日本農林規格」における1類の構造用合板は、屋外又は常時湿潤状態となる環境下で使用することを主な目的としたものである。

〔No. 23〕 木造建築物の腐朽・防腐・防蟻等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木材の腐朽菌は、酸素、温度、水分及び栄養素の全ての条件が満たされた環境下でなければ繁殖しない。
2. ヤマトシロアリは、湿潤した木材を食害するので、一般に、被害は建築物の下部に多い。
3. 床下の防蟻措置において、薬剤による土壌処理を行う場合、床下の布基礎の周辺及び束石の周囲に行うことが有効である。
4. 加圧式防腐処理木材であれば、現場で切断しても、加工面の再処理を行わずに用いることができる。
5. 外壁をモルタル塗り仕上げとする場合の軸組の腐朽防止には、外壁通気構法が有効である。

〔No. 24〕 鉄筋コンクリート造において使用する材料等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 異形鉄筋の呼び名であるD10などに用いられる数値は、一般に、公称直径の寸法(mm)を四捨五入して整数で表したものである。
2. コンクリートの乾燥収縮は、一般に、水セメント比の大きいコンクリートほど大きくなる。
3. 鉄筋のかぶり厚さは、コンクリートの中性化や火熱の影響が鉄筋に及ばないように定められている。
4. 普通コンクリート(設計基準強度 21 N/mm<sup>2</sup>)のヤング係数は、鉄筋のヤング係数の約  $\frac{1}{2}$  である。
5. ブリーディングは、コンクリートの打設後に練混ぜ水の一部が分離して、コンクリートの上面に上昇する現象である。

〔No. 25〕 建築材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 花こう岩(御影石)は、耐久性に優れているが耐火性に劣るので、耐火被覆材には適さない。
2. 粘土瓦は、一般に、耐火性及び耐久性に優れている。
3. ALCパネルは、一般に、防水性及び防湿性に優れている。
4. けい酸カルシウム板は、耐熱性に優れているので、内装材や耐火被覆材等に用いられる。
5. 低放射複層ガラス(Low-Eガラス)は、中空層側のガラス面に特殊な金属膜をコーティングしたもので、断熱性及び遮熱性に優れている。

# 学科Ⅳ（建築施工）

〔N o. 1〕 建築工事に関する報告・申請・届出とその提出先との組合せとして、誤っているものは、次のうちどれか。

1. 工事監理報告書 ————— 建築主事
2. 道路占用許可申請書 ————— 道路管理者
3. 道路使用許可申請書 ————— 警察署長
4. 建築物除却届 ————— 都道府県知事
5. 建築工事届 ————— 都道府県知事

〔N o. 2〕 木造2階建て住宅の建築工事現場における仮設工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 仮設工事計画書は、施工者が作成して保管した。
2. 仮囲いに設ける出入口の扉は、内開きとした。
3. 縄張りによって建築物の位置を定め、工事監理者の承認を受けた。
4. 枠組足場は、足場の組立て・解体作業中の墜落防止のために、手すり先行工法とした。
5. 単管足場の組立てにおいて、建地の脚部に用いたベース金具を、地盤面上に直接設置した。

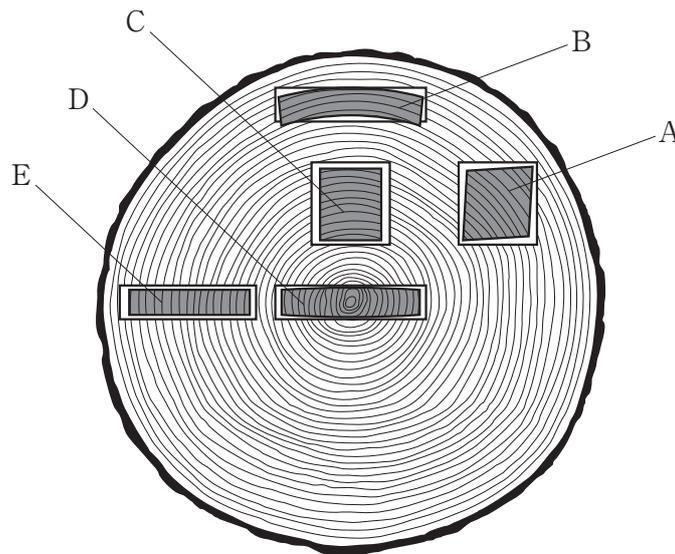
〔N o. 3〕 木造2階建て住宅における土工事、地業工事等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ベンチマークは、コンクリート杭を用いて移動しないように設置し、その周囲を養生した。
2. 遣方<sup>やりかた</sup>において、水杭の上部を<sup>いすか</sup>翳切りとした。
3. 割栗石は、二層小端立とし、隙間のないように敷き詰めた。
4. 掘削底面の安定化を図ることや、基礎スラブなどのフレッシュコンクリートの流出・脱水などを防ぐために、捨てコンクリート地業を行った。
5. 砂利地業に使用する砂利は、粒径のそろった砂利ではなく、砂混じりの切込み砂利を使用した。

[No. 4] 木造2階建て住宅における基礎工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 外周部の基礎コンクリート部分に床下換気孔を設けずに必要な床下の換気確保するため、外周部の全周にわたり、基礎と土台との間に気密パッキン材を用いた。
2. 布基礎の立上り部分の地面から基礎上端までの高さを、400 mmとした。
3. アンカーボルトのコンクリートへの埋込み長さを、250 mmとした。
4. コンクリートの呼び強度を、特記がなかったので、24 N/mm<sup>2</sup>とした。
5. 普通ポルトランドセメントを用いたコンクリートの打込み後、最低気温が15℃を下回らなかったため、型枠の存置期間を3日とした。

[No. 5] 図のような丸太材(針葉樹)の木取り位置A～Eにおける木材の乾燥収縮に伴う変形(網かけ部分)として最も不適当なものは、次のうちどれか。



丸太材の断面

1. A
2. B
3. C
4. D
5. E

〔N o. 6〕 木造住宅における木材の一般的な使い方として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 大引は、背を上端にして使用した。
2. 土台は、背を下端にして使用した。
3. 梁は、背を上端にして使用した。
4. 柱は、末口を上にして使用した。
5. 敷居は、木表を上端にして使用した。

〔N o. 7〕 木造軸組住宅の施工順序として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 建方 → 仮筋かい → 建入れ直し → 本筋かい
2. 床束 → 大引 → 根太 → 床下地板
3. 垂木 → 鼻隠 → 広小舞 → 野地板
4. 小屋束 → 母屋<sup>もや</sup> → 棟木 → 垂木
5. 側土台 → 間仕切土台 → アンカーボルトの締付け → 火打土台

〔N o. 8〕 木造軸組住宅における部材と使用する樹種との一般的な組合せとして、最も不適当なもの、次のうちどれか。

1. 小屋梁 ————— アカマツ・ベイマツ
2. 土台 ————— ヒバ・クリ
3. 筋かい ————— ラワン・スプルース
4. 柱 ————— ヒノキ・ベイツガ
5. 胴差 ————— スギ・ベイマツ

〔No. 9〕 2階建ての木造軸組住宅における合板等の施工に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 大壁造の面材耐力壁において、構造用合板の留付けに当たり、釘打ちの間隔を150 mmとした。
2. 大壁造の面材耐力壁において、せっこうボードの留付けに当たり、釘打ちの間隔を150 mmとした。
3. 柱と横架材との接合部を山形プレート(VP)で補強する箇所については、その部分の構造用合板を切り欠き、その周辺に釘を増し打ちした。
4. 構造用面材を柱、梁等以外の部分で継ぐに当たり、受材の断面寸法を15 mm×90 mmとした。
5. 真壁造の面材耐力壁に使用する構造用面材には、厚さ9.5 mmのせっこうラスボードを用いた。

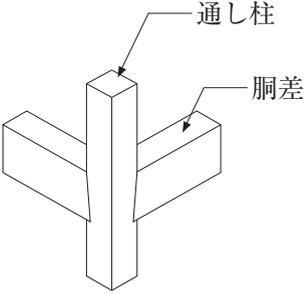
〔No. 10〕 木工事における各部材とその接合部に用いられる継手との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

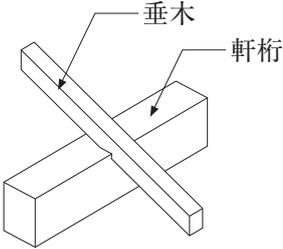
1. 土台 ————— そぎ継ぎ
2. 柱の根継ぎ ————— 金輪継ぎ
3. 梁 ————— 追掛け大栓継ぎ
4. 桁 ————— しゃち(さお)継ぎ
5. 竿縁 ————— <sup>いすか</sup> 鶺継ぎ

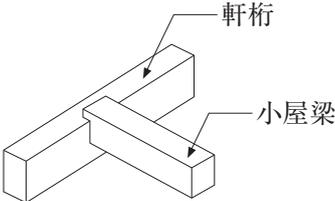
〔No. 11〕 木工事における各部材とその接合部に用いられる仕口との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

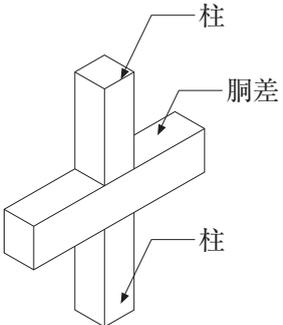
1. 通し柱と胴差 ————— <sup>かた</sup> 傾ぎ大入れ短ほぞ差し
2. 小屋梁と軒桁 ————— かぶと蟻掛け
3. 土台の隅部取合い部 ————— 二枚ほぞ
4. 土台と隅柱 ————— 扇ほぞ差し
5. 土台と火打土台 ————— <sup>かた</sup> 傾ぎ大入れ

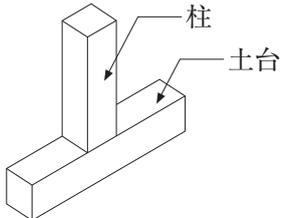
[No. 12] 木工事における各部材とその接合部に用いられる金物との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1.  \_\_\_\_\_ かね折り金物 (SA・S)

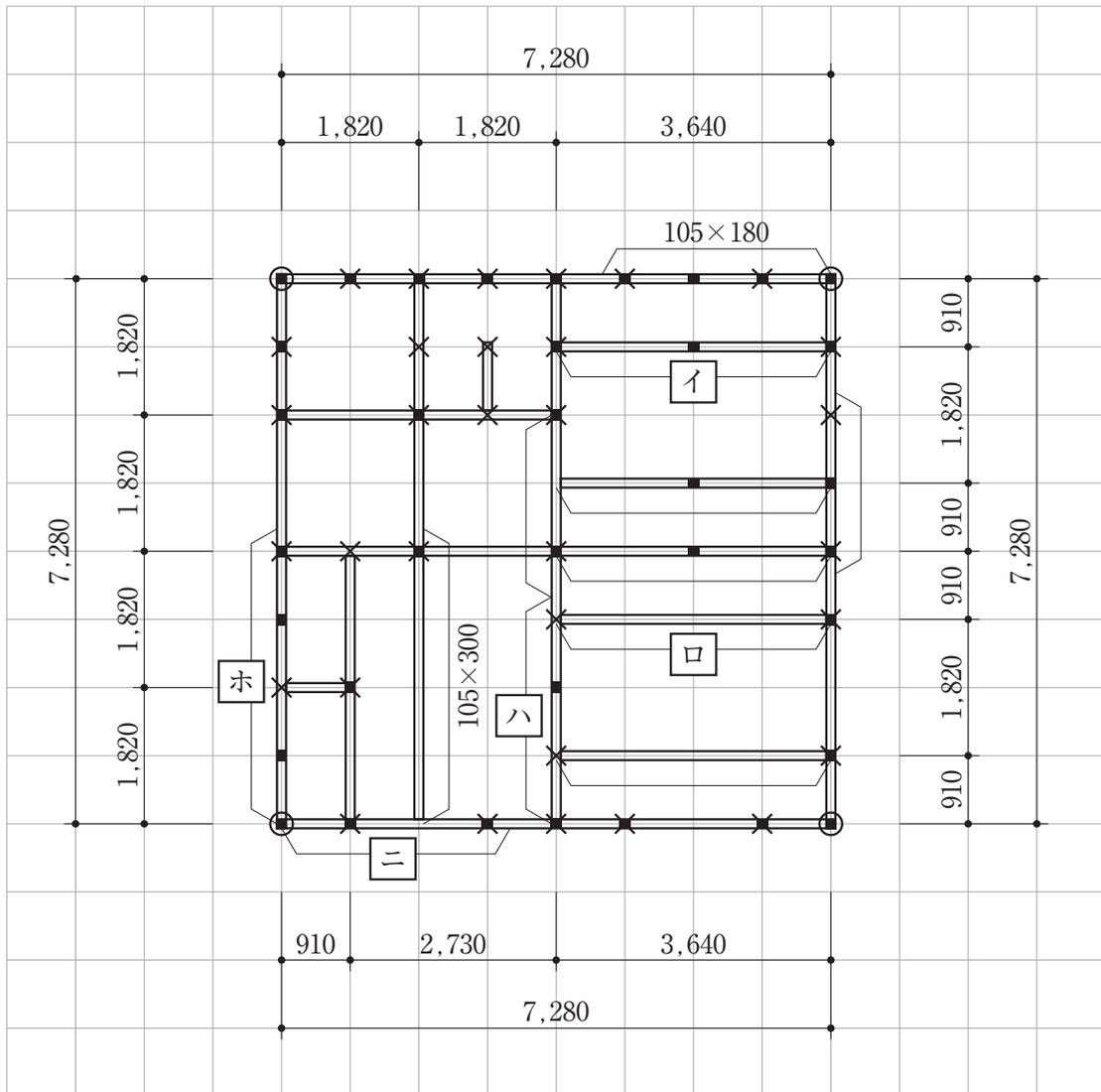
2.  \_\_\_\_\_ ひねり金物 (ST-12)

3.  \_\_\_\_\_ 羽子板ボルト (SB・F)

4.  \_\_\_\_\_ くら金物 (SS)

5.  \_\_\_\_\_ 山形プレート (VP)

[No. 13] 図のような木造2階建て住宅の2階床伏図において、部材「イ」～「ホ」とその断面寸法(幅mm×せいmm)の組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、建築物は多雪区域以外の一般地域内に建つものとし、根太及び火打梁の表示は省略している。また、添え板(枕梁)等はないものとする。

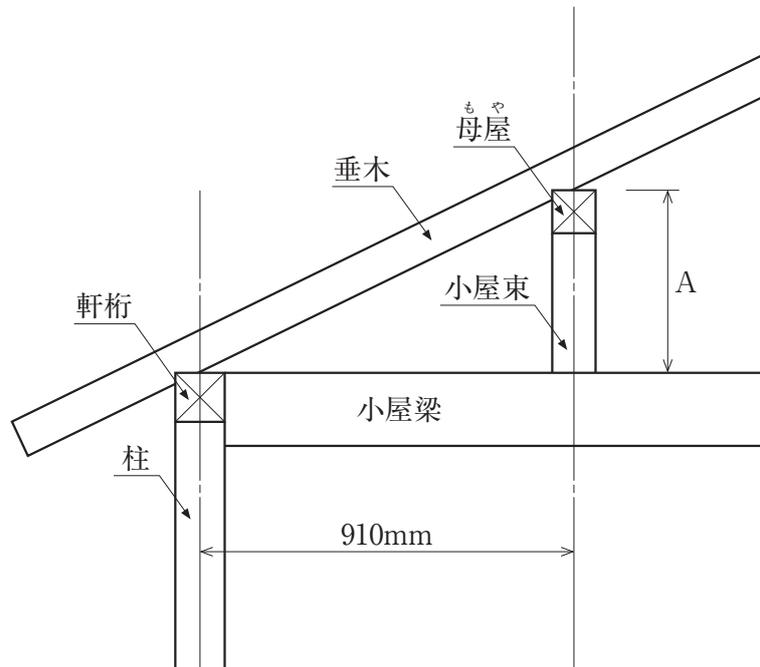


(単位：mm)

凡例	表示記号	通し柱	1階の管柱	2階の管柱	1階と2階が重なる管柱	胴差・2階床梁	
						(正角材)	(平角材)
		●	×	■	⊗	—	—

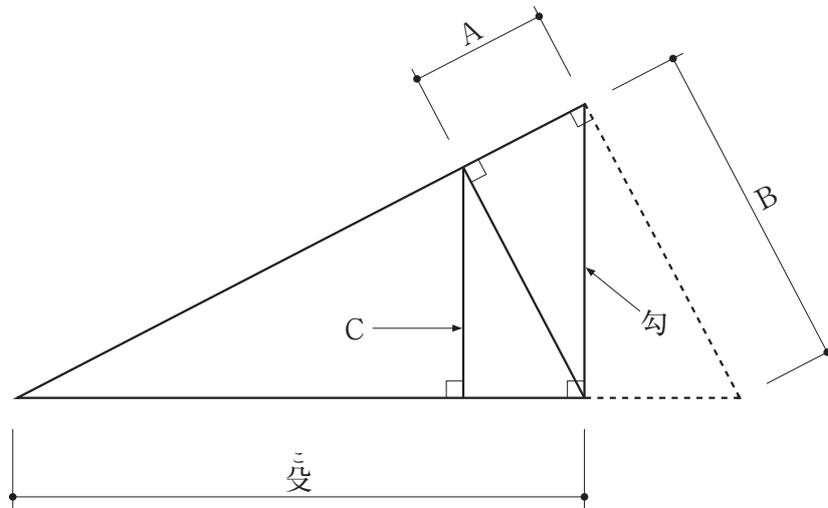
1. イ ————— 105 × 360
2. ロ ————— 105 × 300
3. ハ ————— 105 × 240
4. ニ ————— 105 × 210
5. ホ ————— 105 × 180

[No. 14] 図のような木造軸組住宅の小屋組において、A(軒桁上端から母屋上端)の寸法として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、屋根の勾配は4寸勾配であり、軒桁心から小屋束心までは910mmとする。



1. 228 mm
2. 273 mm
3. 303 mm
4. 364 mm
5. 455 mm

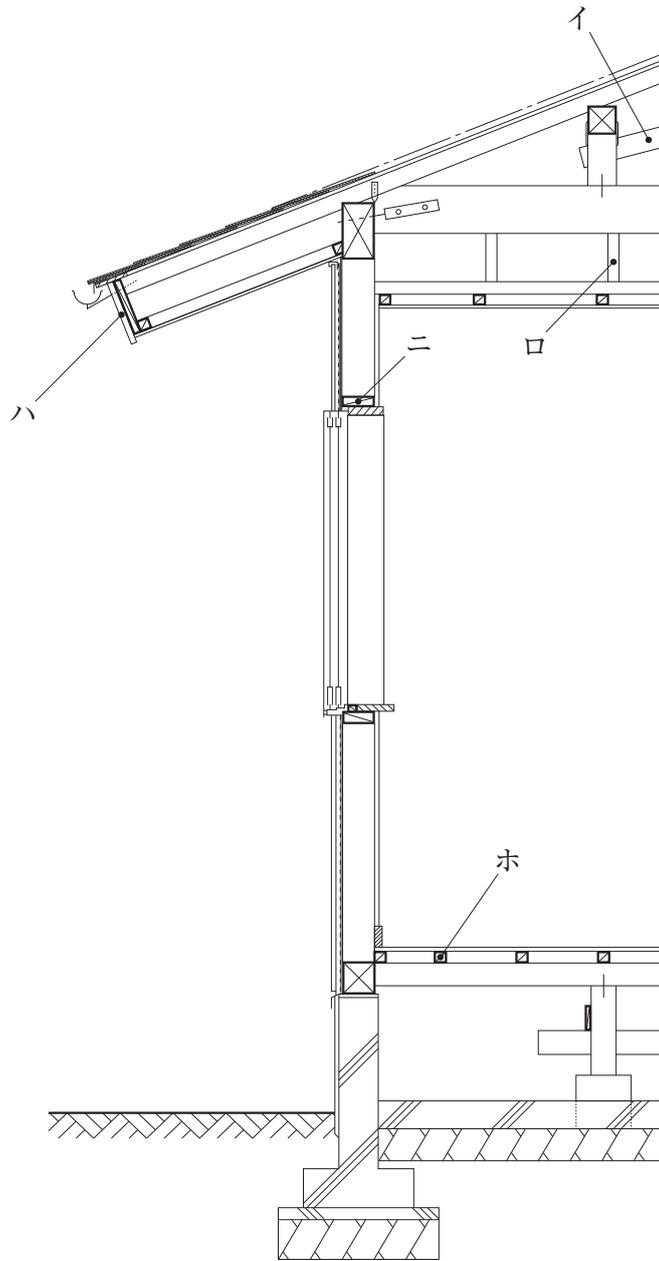
[No. 15] 規矩基準勾配図における線分A～Cとその名称との組合せとして、正しいものは、次のうちどれか。



規矩基準勾配図

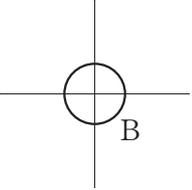
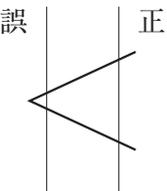
	A	B	C
1.	補 玄	短 玄	小 勾
2.	補 玄	短 玄	中 勾
3.	補 玄	短 玄	欠 勾
4.	短 玄	補 玄	小 勾
5.	短 玄	補 玄	欠 勾

[No. 16] 図のような木造軸組住宅の矩計図における部材イ～ホの名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



- 1. イ ————— 小屋貫
- 2. ロ ————— 吊木
- 3. ハ ————— 広小舞
- 4. ニ ————— 窓まぐさ
- 5. ホ ————— 根太

[No. 17] 木工事における部材の墨付けに使用する合印とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	合 印	名 称
1.		心印
2.		切り墨印
3.		ほぞ穴印
4.		にじり印
5.		間柱心印

〔No. 18〕 木造住宅における屋根工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. アスファルトルーフィングの留付けには、ステーブルを使用した。
2. アスファルトルーフィングの左右(長手方向)の重ね幅は、150 mmとした。
3. 化粧スレート葺板の切断は、押切りカッターにより行った。
4. 金属板の留付けに用いる釘は、葺板と同系材料のものをを使用した。
5. 合成高分子系ルーフィングは、製造所の仕様により施工した。

〔No. 19〕 木造住宅における左官工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ラスボード下地へのせっこうプラスタ<sup>・</sup>ー塗りにおいて、上塗りは、中塗りが半乾燥の状態<sup>・</sup>で塗り付けた。
2. ラス下地へのし<sup>・</sup>く<sup>・</sup>い<sup>・</sup>塗りにおいて、上塗りは、中塗りの水引き加減を見計らい、こて<sup>・</sup>圧を十分に<sup>・</sup>かけて塗り付けた。
3. モルタル壁塗り工法において、下塗り(ラスこすり)は、ラスの表面より1 mm程度厚く塗り付けた。
4. モルタル壁塗り工法において、下塗り後、中塗りまでの放置期間を1週間とした。
5. 外壁のモルタル壁塗り工法において、1回の塗り厚を6 mm程度とした。

〔No. 20〕 木造住宅における塗装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木部のや<sup>・</sup>には、小刀等を用いて削り取った。
2. 木部は、合成樹脂調合ペイント塗りとした。
3. パテかいは、一度に厚付けせず、数回に分けて行った。
4. 塗料等が付着した布片は、自然発火のおそれがあるので、塗装材料の保管場所に保管した。
5. 合成樹脂エマルジョンシーラーの希釈には、水道水を用いた。

〔N o. 21〕 木造住宅における建具工事及び内装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木製フラッシュ戸の表面材に用いる普通合板の厚さを、4 mmとした。
2. せっこうボードを現場で積み重ねて保管するに当たり、湿気の多い場所を避け、表合わせの2枚組として重ねた。
3. 建具の<sup>かまち</sup>框に用いる木材の含水率は、15 %以下とした。
4. 雨がかりの木製引戸の召合せは、いんろうじゃくりとした。
5. 厚さ12.5 mmのせっこうボードを木製壁下地に釘打ちするに当たり、釘の長さを25 mmとした。

〔N o. 22〕 木造住宅における設備工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 給湯管には、架橋ポリエチレン管を用いた。
2. 給水管は、べた基礎のコンクリート内に埋め込まないようにした。
3. 寒冷地以外の一般敷地内における給水管の地中埋設深さは、土かぶりを200 mmとした。
4. 雨水ますには、底部の泥だめの深さが200 mmのものを用いた。
5. ユニットバスの設置に当たって、下地枠の取付けに並行して、端末設備配管を行った。

〔N o. 23〕 木造住宅の工事において使用される工具とその用途との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. タッカー ————— フローリングの取付け
2. エアネイラー ————— 合板の釘打ち
3. ラチェットレンチ ————— ボルトの締付け
4. バーベンダー ————— 鉄筋の折曲げ
5. プレーナー ————— ビスの締付け

〔N o. 24〕 建築積算に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 計画数量は、設計図書に基づいた施工計画により求めた数量である。
2. 所要数量は、定尺による切り無駄や施工上やむを得ない損耗を含まない正味の数量である。
3. 長さ、面積及び体積の単位は、原則として、それぞれm、 $m^2$ 及び $m^3$ とする。
4. 共通費は、共通仮設費・現場管理費・一般管理費等を合わせたものである。
5. 工事現場における工事中機械の搬出入のための輸送費は、直接工事費に該当する。

〔N o. 25〕 建築工事の設計図書間に相違がある場合の一般的な優先順位(高→低)として、最も適当なものは、次のうちどれか。

1. 現場説明書 → 設計図 → 特記仕様書 → 標準仕様書
2. 現場説明書 → 特記仕様書 → 設計図 → 標準仕様書
3. 現場説明書 → 特記仕様書 → 標準仕様書 → 設計図
4. 現場説明書 → 設計図 → 標準仕様書 → 特記仕様書
5. 現場説明書 → 標準仕様書 → 特記仕様書 → 設計図

